

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

ニュースレター33号において、「祈りのシスターズリレー」についてご紹介いたしました。祈りで支えてくださっているシスターの働きは目に見えないものですが、大変貴重で、私たちはどれほど助けられているか、はかり知れないものがあります。

しかし、これと並行して、あるシスター方は実際ベースに関わり、ある人はスタッフとして、ある人は長期ボランティアとして、またある人は定期的に関わってくださっています。今回は、こうしてベースで支えてくださっているシスターの働きをご紹介いたします。

紙面の都合上、残念ながら、関わってくださっているすべてのシスターに書いていただくことができませんでした。その方々には、またの機会にお願いしたいと思っています。

「それでも神はわたしたちと
ともにおられる。
それでも神はわたしたちを
愛しておられる」

石巻ベースでの9ヶ月間のお手伝いの後、釜石ベースに移動してから半年が過ぎました。被災地でお手伝いできる場を頂いていることに心から感謝しています。

2011.3.11の地震と津波は、多くの人の命を奪い、原子力発電所を含む多くの建物、家屋を崩し、飲み込みました。でもその被害の甚大さゆえに、それまでなかなか超えることがなかった教区の境、修道会の境、社会との境を越えて協力しあう具体的な行動へと日本の教会を駆り立てました。この現実からの呼びかけへの応答が、単なる一過性のはやり病に終わることがないようにと願いつつ、釜石ベースでも超修道会的協力のもと、日々祈り、ささやかな活動を続けています。実際、釜石教会の聖堂での毎朝の祈りはわたしたちを励まし、支え、大きな力を注いでくれます。

1995.1.17の朝をわたしは神戸で体験しました。大きな怪我をしたわけでも、住むところを失ったわけでもなかったのに、その揺れはわたしの頭と心と体とを一斉に別の方向に走り出させるかのような霊的、精神的激震の体験をもたらしました。十数年の時を経て、「それでも神はわたしたちとともにおられる。それでも神はわたしたちを愛しておられる」との確信を込めた笑顔をもって今日の活動にあたりたいと願いつつ、毎日の活動に参加しています。それゆえ被災地での活動はわたしにとって大変貴重な時間です。

釜石ベースのスタッフの方々は、4月NPO法人化に向けて、本当に全力で準備に当たっています。この動きが、釜石の人々とより長期的に、腰を据えてかかわり、ともに歩んでいく更なる一歩となるよう、これからも皆さんの暖かいご支援とお祈りをお願いいたします。そしてお時間のゆるす方はぜひベースにもいらしてください。ご一緒に祈り活動できる日を楽しみにしています。



釜石ベース
援助修道会 Sr.山本 紀久代

温かく寄り添っていききたい

昨年4月26日より釜石ベースでの活動に参加させていただいてから、10ヶ月が過ぎようとしています。

若い活動的なスタッフの皆さんの中で、ウロウロ邪魔をするのでは、と心配でしたが、釜石に来たボランティアの方の「温かさにひかれて、また来ました」の言葉のように、優しさと互いの心遣いが漂うベースの皆さんに支えられ、「何をするか」でなく「何ができたろうか」と思う日々でしたが、活動に参加すること、毎日の人々との出会いで、新しい体験ができる恵みを感謝しています。

お茶っこサロンで、「いつまでもいてね」と言われた一言が、「いるだけでいい、そこにいて」を現実として教えていただいたように思いました。

初め、お茶っこに集う方々の明るさに驚きました。本当に立ち直った姿に見えるくらいでしたが、何度かお会いするうちに、それは心に深い悲嘆を秘めた明るさだと知ったとき、その明るさ、笑顔が本当に尊く見えました。

復興住宅になっても、お茶っこをつづけてほしいと願う方々にとり、ここは本当に必要な場、時であること、まだ話したいこと、聞いてほしいことがある人々は多く、そのために活動に与えられている使命を感じるこの頃です。

一方、このような集いの場に出て来られない方々のために行われている見守りチームの活動、仮設、または在宅の方々に病氣、障がい、独居等々、多くの事情を抱え、支援を必要とされる方の見守り訪問や傾聴も、これからもっと必要になってくるでしょう。話を聞いてくれる相手がない寂しさが、孤立へつながらないようにと願いながら、訪問をしています。

今、多くの方は、土地、住宅の問題など、思い通りにならない状況の中で、自分が抱えている苦しみ、不安に自らが向き合うことで、痛みを感じながらも、心に節を作り、前に進もうとしておられます。その姿は、ゲッセマネの園で苦悩なさるイエス様と重なり、私にとっては苦しむ人と共におられるイエス様との出会いの場……釜石です。

「全部無くなったから、今、生きている」。80歳代の方の悲嘆をかみしめての言葉です。まだまだ多い、このような方々と、これからも温かく寄り添っていくことができますように、と願っています。

釜石ベース

聖心の布教姉妹会 Sr.五十嵐 悦

米川ベースのスタッフとして 学校から被災地支援に派遣され

2011.3.11から1年が経過した頃でした。国内外から祈りや支援の手が差しのべられ、ボランティア活動が繰り広げられている情報を耳にしながら私も何かできないかと思いつつ、学校使徒職に埋没していた時、急きょ、4月から一年間福山暁の星学院職員から長期ボランティアとして被災地復興支援のため現地に派遣されることになり、米川ベースのスタッフとして現在に至っています。



主な仕事は、ボランティアさんをあたたかく迎え、食糧の買い出しや炊事の手伝い等の内勤ですが、ボランティアの皆さんと一緒に活動に出かけることも多くなりました。ここに来られるボランティアの皆さんは、国籍、宗教、年齢、立場の異なる違いを超えて“他人のために何かしたい”という絆で繋がっています。昨年の夏休みには、全国から来て下さった大勢の学生ボランティアと一緒に瓦礫撤去作業をしました。泥まみれになり汗を流して無心に働いている姿は、私にはとても眩しく輝いて見えました。瓦礫の仕分けを手伝いながら、全身全霊、時間も疲れもすべてを投入することが自分にできる奉仕だということ、今ここで自分が被災地の人々と共に居ることが大切なんだと気づかされました。また、国や行政の力や効率もさることながら、人々と心と意思を共有し、それぞれの置かれた場で時間をかけ、人の力や手を通して少しずつ復興へと向かっていくことが被災地の人々と繋がっていくことではないかと思いました。

震災後、被災者の計り知れない悲しみや苦しみ、心の傷が少しずつ癒されていく場に遭遇することがあり、それにこちらも慰められ元気づけられています。津波で大切な方を亡くされた方が、辛い体験を何度もくり返し話されながら、少しずつ前に向かって進んでいける様子を伺うことができました。



また、「津波で流された自宅前の海岸まで、今日はじめて来ることができた。」と話されたおばあちゃんの悲しみや辛さを堪え、振りしきる思いが伝わり、胸がキュンとなりました。また、ある漁師さんが「この海ですべてをもっていかれて失った。また、この海で（生かされ）暮らせるようになった。」と、ポツリとおっしゃったことが今も心に深く残っています。

援助マリア修道会

Sr. 小西 末子

交わりの喜びを生きて

米川ベースの近くに私たちの共同体が出来てから1年2ヶ月が過ぎました。近隣の方々の優しさにつつまれて、感謝の日々を過ごしています。

私たち3人は各々3か所の仮設住宅の「お茶っこ」に出かけ、交わりの時を大切に過ごしています。また、滞日外国人（主にフィリピン人）の方々のためのミサにあずかり、その方々の子どもさんたちのカテジスを月1回、ミサの機会にしております。1月6日主のご公現の祭日に南三陸町在住の8人の小学生が受洗の恵みをいただきました。また、月に1度、近くの米川聖マリア保育園の園児たちにお話をしに出かけています。とてもお行儀よく、静かに聴いてくれます。クリスマス会にも招待され、楽しいひと時を過ごしました。



フィリピン人の姉妹が米川在住のフィリピン人と連絡を取り、初めて1月20日の日曜日に11名の方が子ども連れで共同体に来てくださり、持ち寄りの昼食会をしました。その後、午後2時からの米川教会のミサにもあずかり、信徒の方々と交わりの時を過ごしました。

米川ベースの方と私が行っている「お茶っこ」では、編み物をしたり、高齢の方は大人の塗り絵、時には折り紙で共同製作をし、集会室を飾り、楽しんでます。少し若い方は、フェルトを使った小物（犬、猫、フクロウ、12支、お雛様など）を作っています。皆様が週に1度の「お茶っこ」をととても楽しみに集まって来てくださいます。また、社協がしている「お茶っこ」にも出かけていますが、午前中だけで50名前後の方が(男女)お茶を飲み、おしゃべりを楽しみに来られ、ゆっくりくつろいで帰られます。和やかで温かい雰囲気「お茶っこ」で私も毎行きの楽しみです。米川ベースの方と出かけている姉妹の「お茶っこ」は、土曜日なので大人も子どもも集まって来られます。相手になって遊んでくれる青年ボランティアに全身をぶつけてまわりつき、喜々としてはしゃぐ子どもの姿が見られます。高齢の方は集まってお話をすることに喜びを感じていらっしゃるの、こちらから発案を出さず、ニーズに応え、出会いの温もりを大切にしています。

「お茶っこ」を通して被災された方々との交わりの機会をいただき、貴重な時を過ごせることを心から感謝しつつ歩んでいます。

聖母訪問会

Sr.山下 正子



福島に来て 「頼まれたことを喜んで」

原町ベースには、聖霊奉侍布教修道女会（以後、聖霊会と略す）のシスターが、今年の1月半ばから、お2人ずつボランティアで来てくださっています。聖霊会内でつないでいく「聖霊会シスターズリレー」とでも言えば、いちばんびったりくるのかもしれません。

現在のシスター2人は、「聖霊会シスターズリレー」としては、5、6番目のシスターです。2月中旬からベースに入り、2月下旬までの予定で、ボランティアやスタッフのお食事を作ったり、仮設住宅でのボランティアも積極的に関わっておられます。「私たちは、頼まれることを喜んでいたい」という心で来ています、とSr.宮入とSr.高橋は語っていらっやいます。彼女たちの書いてくださった文章をご紹介します。

ボランティアとしてカリタス原町ベースを手伝いながら、ここに集まる人々、あるいはこの地域に住む人々との交流が出来たことは、自分にとって大きな意味があると感じています。「百聞は一見に如かず」という言葉の意味を良く噛み締めながら、一つ一つの聴くこと見ることに、興味深く感動しています。その中でも殊に感じたのは、小高町に行った時の印象は忘れられません。

残された沢山の立派な家々、田畑、物置小屋など、誰かがそこにいて呼ぶと出てきそうな感じを受けました。しかしそこには、人っ子一人おらず、犬一匹いませんでした。「無人村に来たのだ。」という印象を強く受け、「ここに住んでいた人々はどこへ行ってしまったのだろう」と思った時、仮設住宅に住むたくさんの人々のことが頭に浮かびました。植木のある庭も、野菜畑もない狭い窮屈な場所に、年寄りが一人または二人住まい、あるいは数人の家族が共に



狭い場を分かち合いながら生活して、もう二年近くなります。その間の彼らの気持ちを思うと、私自身さえも、やりきれない気持ちになります。そのうえ、いったいつまでこれが続くのか？ 苦労して耕した田畑、たくさんの実りをもたらしてくれた田畑や漁場は、どうなるのだろうか？ 先の見えない、ぼやけてしまっている未来に、彼らはどのようにして生きていけるのだろうか？ ただ彼らに寄り添い、聴くことしかできない自分が情けなく思います。少しでも多くの人々がこういう実情を知り、知恵を分かち合い、国全体が自分事として、力を合わせて、苦しむ隣人のために協力して行けたなら、どんなに力強いことでしょうかと思います。

塩釜出身の私が、塩釜に来て

初めまして。私はイエスの小さい姉妹の友愛会のアスンタ紀恵子（海老）と申します。長野の松川町の共同体から被災地支援のため派遣されてきました。去年の4月14日から、カトリック塩釜教会に住まわせていただき、10ヶ月が過ぎました。カトリック塩釜教会は、私の受洗教会であり、私は塩釜出身です。10月上旬まで、2人でしたが、当会会員が少ないため、現在は1人で、塩釜教会の皆さんに支えられながら生活しています。

今、私のしていることは、塩釜教会と東仙台教会が行っている「伊保石仮設住宅の集会所」での「みそ作り」です。これは、スタッフ、仮設住宅からの参加者24、5名双方に好評なのです。交わりも楽しく、また、カトリックならではの国際的雰囲気もあり（ボランティアで来てくださる方々の中には、メキシコ、ケニア、ポーランド、フランスなどからの方がいらっやいます。）皆さんに喜ばれています。

また、もう一カ所、塩釜ガス体育館の敷地内にある仮設住宅で、「お茶っこサロン」を去年7月から始めました。今はスタッフを含め、14、



5名になることもあります。各々手作りの料理を持って参加して下さります。よくしゃべり、よく食べ、よく笑い、参加者が自発的になり「もう大丈夫！ 自分たちでやっていける」と感じるようになりました。

もう一つ、去年11月から始めたことは、「伊保石の仮設住宅での傾聴」です。130軒の住宅を、信者さんたち5、6人で共に、一軒一軒回っています。これは、毎金曜日、午前10時からお昼ごろまで行っています。みそ作りで出会った方もいて、「ここに、住まわれていたの！」とあらためての出会いで……。受け入れられてもいます。さびしそうにしている方には、「みそ作りがありますよ。参加しませんか？」と声をかけたり。みそ作り、お茶っこサロン、傾聴、良い相乗効果だなと思っています。

神様の大切な宝もの、被災された一人ひとりが、最後までこの多難な人生を生き抜いてくださいますように……と祈りながら、信者さんとともに活動しています。

イエスの小さい姉妹の友愛会 Sr.アスンタ 紀恵子

ボランティアを通して体験すること

昨年4月からボランティアとして、被災者（被災地）と関わらせていただいています。震災1年目は勤務のため、被災地に来ることができなかったのが、本当に恵みの時を与えられたと感謝しています。遠方からボランティアに来られた方と出会うと、本当にありがたいと感じます。

私は火曜日に東松島市ひびき仮設住宅でのお茶会、第一、第三金曜日は、石巻市東北電子仮設、第二、第四金曜日は、石巻市南境仮設住宅でのお茶会に参加し、被災者の方々とお茶を飲みながら、語られる言葉に耳を傾けています。今は、物よりも、安心して話のできる相手が求められているように思えます。



A氏はほぼ毎回、被災当時のことを涙をにじませながら話すことによって、今も苦しい、寂しい、むなしいと嘆かれるが、同じ避難所にいた人を皆で助けることができてうれしかったこと、ボランティアとの出会い、亡き最愛の妻が自分の背を押してくれていることを感動しながら語られるなど、話のポイントが移ってきました。それと同時に、深酒している近所の人を心配してお茶会に誘ったりと、積極的になられたように思われます。壮絶極まる話を聴いても、前進が感じられ、共にいるのは比較的楽です。

B氏は、「思い出すのも嫌だ」とハッキリ言い、楽しかった思い出をよく話されます。懐かしそうに話される様子を見て、失った普段の生活がどれほど大切だったか、また、現在のつらさが感じられ、かえって胸が締め付けられる感じがします。

話を聴くほどに「十人十色」であり、お一人おひとりに対する、私の心の動きも違います。私にできることは、心を開いて話を聴き、相手の気持ちを味わおうとすることです。すると、お一人おひとりの体験の微妙な違い、歩みの違いなどが見え、複雑さ、難しさを感じるものの、だからこそ、互いに助け合って生きていけるのではないかと希望を見いだす今日この頃です。

オタワ愛徳修道女会 Sr.築澤 由美栄